

平成23年9月15-17日に、京王プラザホテル(東京)に於いて、第一内科学講座 田中良哉教授を会長として第39 回日本臨床免疫学会総会が開催されました。メインテーマは「**免疫疾患への新たな挑戦**」で「免疫疾患学会連合2011」として、第23 回日本神経免疫学会学術集会と合同開催致しましたが、両学会に加えて日本消化器免疫学会、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会、日本生殖免疫学会、日本がん免疫学会の4学会とシンポジウム共催とした極めて斬新的な企画でした。本総会の約40年の歴史上初めての試みでしたが計1000名を超える参加者を数えました。

免疫学、臨床免疫学の近年の進歩は実に目覚ましく、分子生物学的手法や概念に立脚した病態の解明、並びに、生物学的製剤や新規低分子化合物等による治療の進歩は、免疫難病の治療に急展開を齎しました。一方、新規治療、診断法の導入には、領域を超えた基礎的、臨床的課題が存在し、免疫という共通言語を介して斯様な問題点を認識、共有し、議論することにより新たな病態解明や治療の進歩につなげることが重要な課題でした。斯様な観点から、6 学会合同開催の特別シンポジウム「免疫疾患のトピックスと将来展望」を企画し、6 学会の代表者に各学会領域の魅力や今後の展望を示して頂きました。さらに合同シンポジウムでは「免疫疾患の治療の進歩」、「免疫疾患の病態解明と診断の進歩」をテーマに各分野のトップランナーの先生方から、最新の情報や知見を紹介頂きました。ここでは、当科山岡邦宏講師がNIH留学時から精力的に取り組んできたリンパ球活性化に重要な働きを担うJakに対する阻害薬の関節リウマチに対する臨床試験成績およびヒト滑膜をSCIDマウスに移植した系における基礎的検討結果が発表されました。さらに、「分子標的薬のエビデンス・レビュー」では、生物学的製剤や低分子量分子標的薬による免疫関連疾患の実践的治療方法、ゴール、臨床的問題点などについて3名の先生方より学際的レビューを頂きましたが、当科田中良哉教授からはシグナル伝達分子を標的とした低分子化合物のタイトルで、前出のJak阻害薬 tofacitinibやSyk阻害薬 fastamatinibを中心とした臨床試験の現状を紹介いただきました。また、教育講演では、免疫学、臨床免疫学を超えて、最も先端的な領域を牽引する先生方の講演を拝聴することができました。

当科からは、ワークショップ(WS)3演題、一般演題 11 演題の発表がありましたが、このうち山岡先生、岩田先生は優秀演題賞を受賞されました。6 つの免疫関連学会の会員、及び、学問の「免疫」という共通言語を介した交流はとても有意義で、幅広い分野から多数の方々が興味を持って参加し、熱い討論をして戴きました。特に、若い研究者や臨床医の先生方から非常に好評であり、今後の新しい学会の流れの糸口になったものと考えます。特別シンポジウム6、合同シンポジウム11、教育講演10、WS54演題、ポスターWS 74 演題で構成された同学会は盛会のうちに終了したことを報告致します。

文責 第1内科学講座 齋藤 和義